

# 恶魔的尾巴

宫原晃一郎

(翻译 萩田丽子)

这是一个发生在远古时代的故事。那时候，地球刚刚诞生，别说人类，就连鸟、兽也没有，只有恶魔。

恶魔都长着一条长尾巴。那就是他们的刀枪。他们明争暗斗，世界没有安宁的时候。

恶魔住在一座高山里。那里有一个大湖，风景秀丽。渐渐地，那地方变成了一座城市。

湖水从城市中间流过，把恶魔分成了两派。

不久，两派恶魔开始打仗。住在别的地方的恶魔也来参战，终于酿成一场大战。

他们为了战胜对方，绞尽脑汁，用尽魔法。战争一年到头，不分昼夜地持续下去。

那时候，太阳诞生不久，放着明亮的光。可是，黑心的恶魔呼出的气把太阳遮得严严实实，世界变得像开天辟地以前一样黑暗了。他们的怒吼声和呐喊声震得地动山摇，沉重的脚步声好像地震和雷鸣一样，可怕极了。

河右岸的恶魔们举起一块块岩石，雨点般投向对岸；河左岸的恶魔们燃起一团团火焰，像火山爆发一样喷向对方。可是双方势均力敌，死伤无数，不分胜负。

上帝觉得世界上不能只有恶魔，他还打算创造鸟类、兽类和人类，让他们也住在地球上。上帝先种了草木，这时刚刚发芽。

可是，因为恶魔大战，上帝的旨意也像草木一样被践踏了。

有一个老魔头，不但身体巨大，而且魔法高强。他原本是上帝手

下级别最高的使者，对上帝的心思了如指掌。所以，他自己并不参加这场战争，只是坐在一边，抽着烟，冷眼旁观。

但是，仗打到现在，老魔头也开始担心了，他皱着眉头自言自语地说：

“不妙啊。如果这样继续下去，最后我们灭绝了怎么办？ 恶魔们把上帝种的草木也践踏了，可他竟然容忍了这一切。这一定是上帝故意让我们自相残杀，最后要把世界交给人类。不行！我得制止这场战争。”

于是，老魔头开始大声呼喊，那声音好像千千万万寺庙的钟声同时敲响，传遍了高山峡谷。

“住手！别打了！”

战争暂且停止。老魔头召开和平会议。

他在会上说：

“大家听着，我告诉你们一件很重要的事。上帝打算创造人类，把世界上所有的东西都给他们，让他们当世界的主人。你们脚下的草木也是上帝给人类种的。

上帝不想让我们生存在这个世界上，他想把我们赶到很远的地方，因为我们和人类水火不相容。

上帝喜欢人类，他要把自己的灵魂倾注到人类的思想之中，让他的美好品德占据人类思想的九成。这样，人类就能变得像上帝一样。但是为了和神有所区别，上帝还留下一成，让人类自己去发展。

如果人类能顺从上帝的旨意，上帝就让自己的灵魂连那一成也占领。那样，人类就会变得和上帝一模一样。

那时候可就麻烦了！我们恶魔在这世界上就活不下去了。不过，现在还有一线希望。

那就是，我们可以去侵蚀还没有被上帝灵魂占据的那一部分，致人类的灵魂腐烂。但是如依然还是像现在这样我们之间的战争不断，

我们就会自取灭亡。所以，以后我们要齐心协力致人类于堕落。”

可是，别的恶魔没有老魔头那么聪明，根本就不听老魔头这番话，七嘴八舌地吵起来：

“胡说八道！”

“这一定是在搞什么阴谋。”

“吹牛！他一定是想当恶魔国的国王。”

“没错儿！”

“教训这家伙！”

“杀了他！”

恶魔们叫喊着，向老魔头冲了过去。

寡不敌众。老魔头狼狈不堪地逃跑了。

他逃到湖岸边，眼看就要被恶魔们追上，忽然想起了自己那条强壮有力的尾巴。于是，他用尽平生的力气，用尾巴在地上打出了一条裂缝。湖水喷涌而出，变成了一条大河。

紧跟在后面的恶魔纷纷落水，被滚滚波浪冲走了。

可是还有一些恶魔跳过大河，继续追赶老魔头。

老魔头眼看就要被这群恶魔追上，就又使劲用尾巴打出一条更宽的裂缝，更多的恶魔掉了进去。

老魔头眼看就要被这群恶魔追上，就又使劲用尾巴打出一条更宽的裂缝，更多的恶魔掉了进去。

剩下的恶魔还在不断地追赶。老魔头又要被追上了。他气喘吁吁，用尽浑身的力气，把大地打开了很多裂缝。湖水像利箭一样哗哗流进裂缝，形成很多大河。恶魔们几乎都掉下去了，被河水冲到了海里。

老魔头累得筋疲力尽，不知不觉躺在路上睡着了。醒来以后，他吓了一跳。原来，尾巴没有了！“一定是刚才击打地面时用力太大，把尾巴打断了吧！”老魔头连忙回头去找，可是毫无踪影。估计是掉在河里，被水冲走了。”

“这可怎么办呢？没有尾巴怎么对付那些家伙？”

老魔头慌慌张张地跨过自己开出的那几条大河，回到了家中。

不过，他的担心倒是多余的，因为大多数恶魔已经淹死了。

他对剩下的恶魔们说：“千万不要再自相残杀了。人类马上就要诞生了，腐蚀他们灵魂才是当务之急。”这次，恶魔们规规矩矩地成了老魔头的手下。从此以后，老魔头的家族渐渐壮大了起来。

但是，因为恶魔没有了尾巴，也就几乎没有了和人的区别。一些愚蠢的人和恶魔交了朋友，腐化堕落了。可是，真正有思想、有头脑的人还是能看清真相。不管恶魔如何变化，也逃不过他们的火眼金睛。



(日本語原文) **悪魔の尾** 宮原晃一郎

それはずっと大昔のことでした。そのころは地球ができてからまだ新しいので、人間はもちろんのこと、鳥や獣すら住まっていませんでした。住まっているものはただ悪魔ばかりであつたのです。

悪魔たちはみんなおそろしく長い尾をもっておりましたので、それを人間で言えば槍や刀の代わりに使って、のべつ幕なしにけんかをしたり戦争をしたり始末におえないので、世界中は治まりがつきませんでした。

こんな悪い悪魔たちでも、やはり仲間とは一緒に住みたいと見えて、とある山の中ほどに大きな湖水のある、見晴らしのよい場所を見つけて、市街をつくっていました。

けれどもこの湖からは、一筋の大きな河が流れて、ちょうど悪魔の市の真ん中を通るものですから、いつかしら悪魔たちは右の岸、左の岸と二派に分かれましたので、とうとう喧嘩を始めました。すると両方へどこからともなく他の悪魔が来て加勢するものですから、その喧嘩がいよいよ大きくなり、ついに戦争になってしまいました。

それからというものは、夜昼の区別なく、春夏秋冬、年がら年中、のべつ幕なしの大戦争で、お互いに敵に打勝つ手段を考えては、その魔法をつかって戦いました。

腹の黒い悪魔の吐く息は、雲か霞のように空を立てこめて、まだ生れてから若い、お天道様の美しい光も覆い隠し、地上はまだ世界がひらけない前のように真っ暗になりました。おまけに唸り合い、いがみ合う声は、山々谷々を揺り動かし、足踏み鳴らすその響きは地震と雷とを一緒くたにしたようで、その恐ろしさといったらありません。

右の岸の悪魔が大きな岩を雨かあられのように投げつければ、左の岸の悪魔は、まるで火山のように口から火焰を噴き出すという具合で、互に魔法のありったけを尽くして戦争しましたが、いたずらに双方がけがをしたり死んだりするばかりで、一向勝負はつきません。

ところでちょうどその時分、神様はあまり世界が悪魔ばかりでは殺風景だからといって、鳥や獣や、それから人間もこしらえて住ませようと、まず、草や木の種をお播きになったのが、ほんの少しばかり芽を出しかけておりました。

それなのに悪魔どもがこの大戦争を始めましたおかげで、せつかくの神様の思し召しも無駄になって、そんなものは皆踏みにじられ焼き枯らされてしまいました。

けれどもこの悪魔のうちに、一匹の大きな悪魔がいました。この悪魔は体が大きいばかりでなく、魔術を一番たくさん知っていて、元は神様のお使いの一等よい一人でありましたから、よく神様の御心を察することが出来ました。ですから、自分ではあまり戦争なんて下らないことはしないで、他の悪魔が一生懸命に生命のやりとりをしているのに、お尻をそこにドッカと据えこみ、煙草なんか吹かして、ただ見ているだけでした。

ところが、こんなに戦争がひどくなると、大悪魔はお日様が曇るような大きな眉のよせ方をして、独り言を申しました。「これはどうも賢いこと

でない。こんなに大きな戦争を永く続けては、しまいには我々悪魔の種族は皆殺されて、根絶やしになってしまう。ひょっとしたら、神様もそのつもりで、黙って内輪喧嘩をお許しになっているのかも知れない。

せっかく神様がお播きになった木や草の種子までも、悪魔が踏み荒しても黙っておいでなさるところを見ると、これからおつくりになる人間にこの世界を渡してしまうため、先ず悪魔同志喧嘩をさして、悪魔が自分から滅びるようにお仕掛なすったかも知れない。これは早く戦争をやめさした方がいいぞ。」

で、大悪魔は大きな声で叫びました。まったく大きな声——まるでお寺の鐘を千も一時につき鳴らしたような大きな声で、ゴーンと山から山へ、谷から谷へ響き渡るほどの声で叫びました。

「皆、しずまれっ！ 戦争、止めっ！」

とにかく、大悪魔の声に、戦争は一時中止されました。けれども平和会議を開いて、今後は悪魔の間では戦争をしないことに決めなければなりません。

さて当日の会議には例の大悪魔が大演説をやりました。

「諸君、わたしは神様が人間というものをこの世界におつくりになって、それに世界じゅうのものをみな与え、世界の主とすうご決心をなさったことを勘付きました。諸君の足の下に踏みにじった草や木の芽生えは、その人間にお与えになるつもりでおつくりなされたものです。

神様は私共悪魔がこの世界にいることをお好みなさんので、どこか遠い遠いところへ追いやっておしまいなさるつもりです。なぜかといえば悪魔がいては人間の邪魔になるからです。

神様は深く人間をお愛しになって、その心に十分の九まで自分の魂をお吹き込みなさるつもりです。ですからほとんど神様と同じになるわけです。ただあと一分だけをお残しになって、神様との区別となさるのであります。

しかし人間が本当に神様の思し召しどおりの行いをするなら、その残り

の一分も神様の御心を頂戴できて、神様と同じになれるのです。

そうになったら大変です。我々悪魔はもうこの世にはおられません。ただ幸いなことには、人の魂のその残りの一分には我々悪魔も又指をいれることが出来ます。

ですから我々はそこにつけこんで、そこから人間の魂を全部腐らしてしまえばよいわけです。しかし今のように我々悪魔の仲間が戦争ばかりしては、皆自滅してしまうばかりですから、これからは仲よくして、力を合せて人間を墮落させることに致しましょう。」

ところが他の悪魔たちは、この大悪魔ほど利口でなかったものですから、その言葉を聞きいれません。

「あいつ。いい加減なこと言っていやがる。」

「そうとも、あんなずるい奴だから、何をたくらんでいるか知れやしない。」

「偉そうなことを言って、自分がこの悪魔の国の王様になるつもりだろう。」

「そうにちがいない。」

「やっつけろ。」

「殺してしまえ。」

一人が言えば二人、三人と、しまいには、ありったけの悪魔がよってたかって、この大悪魔ひとりをめがけて、打ってかかりました。

大悪魔はただ一人ではかないませんから、ほうほうのていで逃げ出しました。

すると悪魔は皆ドンドン後を追いかけて来ます。

ちょうど大悪魔が山の湖の岸まで逃げて来たとき、追いつかれそうで、大分危くなりました。でどうしようと困っているとき、ふと思い付いたのは例の力強い尾です。大悪魔はこれはよいことがあると、その尾を振って地面を一打ち打ちました。

すると、地面が大きく裂けて、その割れ目へ湖の水がどしどし流れ込み、大きな河になりました。ですから追って来た悪魔のうち、足の早い者だけがこの割れ目を跳び越していましたけれど、後れたものはその中に落ちて、アブアブしながら、溺れるやら、流されるやら大騒ぎでした。

けれども割れ目をとんだ悪魔も沢山いましたから、そんな奴がやはり追っかけて来ます。

またまた近く追いつかれそうになりましたから、二度大悪魔は例の尾で力いっぱい地面を打ちますと地面は割れて、湖の水が流れ込みました。今度の割れ目は前のよりも大きかったので、また沢山の悪魔が落込みました。

けれども悪魔の方はあとからつづいてくる者が多いので、やはりドンドンと追いかけて、またまた追いつかれそうになります。大悪魔は苦しくて苦しくてたまらないものですから、三度目には力いっぱい、無茶苦茶に尾で地面をたたきつけましたので、いくつもいくつも大きな河ができて、湖から水が矢を射るようにゴウゴウ音を立てて流れました。追いかけて来た悪魔どもは大抵その中に落ちて、海へ押し流されてしまいました。

大悪魔は、だいぶ働いたので、すっかり疲れ、ぐったりとして道端に寝ていましたが、ふと気がついて驚いたのは、自分の強い尾がなくなっていることでした。

「あんまり強く地面をたたいたので、切れてしまったものと見える。」と大悪魔はそこを探してみましたが、きっと河の中に落ちて水に流されたのでしょうか。影も形も見えませんでした。

「驚いた、驚いた、尾がなくなったら、どうして他の悪魔を防げるだろうか。」

大悪魔は心配しながら、自分がこしらえた大きな川を幾つも幾つも跳び越えて、自分の家に帰りました。

けれども他の悪魔から攻撃を受ける心配はなくなっていました。という



のは大悪魔の敵はみな、たいてい川に溺れて死んでしまったからでした。

で後に残ったわずかの悪魔に、仲間同志の喧嘩は決してするものでない。それよりも人間がいまにできたら、その魂を腐らすことに力をいれるがよいと教えました。他の悪魔どもも今度はよく分かりましたから、もう手向いせず、大悪魔の家来になりましたので、大悪魔の子孫はだんだん数が増えて、地上に栄えました。

けれどもそれから皆、尾がなくなりましたので、悪魔の姿は大変人間にまぎらわしくなり、そのため愚かな人間は悪魔と友達になって墮落しました。

ただ賢い人の目にだけは、その無い尾がちゃんと見えるので、どんなにうまく化けても悪魔の正体はすぐ分かるのです。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。

